

## 第3セクターの組合誕生を きっかけに運動が活性化



### 高知一般・土佐食支部の結成

高知県西部の土佐清水市は、太平洋を望む、かつては漁業の盛んな地域であったが、農林水産などの一次産業が衰退していく中で、地域を支える産業も衰退し、自治体職員や教員、国の出先機関で働く労働者によって地域が支えられるようになった。そんな土佐清水に作られたのが、市の第3セクター「土佐食」である。宗田ガツオを原料としたキャットフードを中心に製造し、180人もの雇用を生み出している。

しかし、そこで働く労働者は正規雇用と言いながら時給制で、最低賃金に近い賃金水準で雇われていた。パワハラ問題等が発生したことから、労働者が全労連・全国一般・高知一般労働組合に相談し、高知一般・土佐食支部が誕生した。

土佐食支部の誕生にあたっては、高知一般労働組合だけでなく、県労連からも支援を行った。その際に大きな力となったのが、土佐清水市労働組合連合会（土佐清水労連）である。

土佐清水労連は、土佐清水地域の幡多教職員組

### 高知・土佐清水労連（土佐清水市労働組合連合会）



書記長 さかした ふみひろ  
坂下 文宏

合（県教組）、高教組、個人加盟からなる地域労連である（土佐食支部結成時にあった全運輸労組四国航空支部土佐清水分会は統廃合によって現在は無い）。この間、出先機関や小中学校の統廃合によって組合員が減少していたが、土佐食支部の誕生によって大きく勇気づけられ、会議や団体交渉へも積極的に参加し、支援を行うようになった。

労働組合の誕生によって、土佐食での働き方も大きく変化した。時給制を月給制へ変更、賃金引き上げ、パワハラの根絶、作業服の支給など多くの前進を勝ち取り、組合員数も60人を超える組織へと成長した。地域に大きな組合が誕生したことで、いったん休止していた地域メーデーも再開され、地域で開催される春闘討論集会は活気のあるものへと変化している。

### 組合が組合を呼ぶ

地域に新たな組合が誕生したことで、地域で起こる労働問題の情報が、組合員を通じて地域労連や高知一般労働組合へ寄せられるようになった。

地元のパチンコ業を営む栄幸商事で働く労働者が、事業規模の縮小を理由に解雇されたが、この相談も土佐食支部の組合員からの相談によって、高知一般労働組合へつながった。

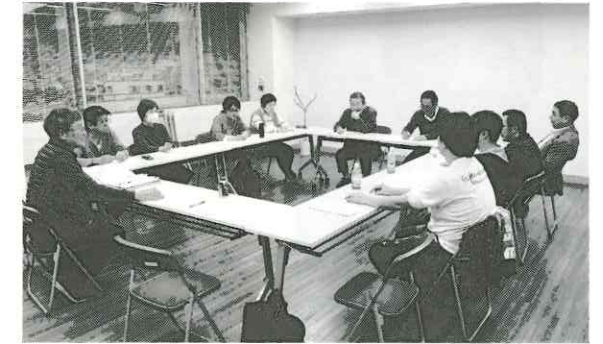
解雇者4人のうち、3人が高知一般労働組合へ加入し、「整理解雇の4要件」を満たしていないとして解雇撤回を求めた。土佐清水労連は、この際の団体交渉にも参加し、支援を行った。結果は、退職金を含む和解金と未払い賃金の支払いを勝ち取り退職となったが、当事者は引き続き高知一般労働組合と地域労連へ加盟することとなった。

後日の交流会で、当事者の組合員は「最初は仕方がないと諦めていたが、たまたま知り合いが土佐食の組合員で、高知一般労働組合につながった。地域に組合があることや地域労連の支援に対し感謝の言葉を述べた。

### 地域春闘討論集会で経験を交流

土佐食支部の誕生を機に、地域での交流も盛んになった。土佐清水メーデーの再開は、地域に労働組合の存在を知らせるイベントとなっている。また、春闘期には地域春闘討論集会を開催し、情勢学習にも力を入れている。今年3月29日に開催した地域春闘討論集会では、前記の栄幸商事の解雇問題でたたかった3人の労働者が参加し、紛争解決を報告した。

参加者からは、「こんなに身近な地域に、解雇問題があることに驚いた」「労働組合の必要性を再認識した」などの感想が寄せられた。この交流の中で、組合員が地域にアンテナを張ってさまざまな問題を拾い上げる大切さが共有された。



春闘討論集会のようす（2018年3月29日）

### 地域の民主団体との連携も

2008年に起きたリーマンショックの際、東京・日比谷で取り組まれた「年越し派遣村」を契機に、高知県でも2009年から「くらしといのち何でも相談会」を実施している。この取り組みは県内に広がり、医療生協やうろこの会（多重債務の支援団体）、地域の弁護士や司法書士などとも共同を広げながら、地域に定着している。土佐清水市でも、土佐清水労連が中心となって「くらしといのち何でも相談会」を年末に開催し、多くの相談が寄せられている。



土佐清水労連は決して大きくはない。年金者組合（現在個人加盟）や県退教（高知県退職教職員協議会）などの退職者が組織を支えている側面もある。しかし、多くの活動家は、地域を支える組織のメンバーでもある。労働組合の枠だけにとらわれない多様な仲間が、現役の労働者や労働組合を温かく見守っているのが土佐清水労連の特徴である。

今後も、土佐清水労連と地域のさらなる発展に向けて、活動を進めていきたい。